四者四様の
演出を楽しむ

4監督プロフィール

五所平之助
ごしょへいのすけ

1902年生。最初の国産トーキー映画を監督し、抒情性豊かな秀作を作り続けた名匠。原作、脚本も書いた『南島の春』(1925)で監督デビュー。国産トーキー映画第1作『マダムと女房』(1931)を監督する。主演・田中絹代とのコンビで『伊豆の踊子』(1933)、『新道』(1936)を発表したのち、代表作『煙突の見える場所』(1953)では、現代の不安の中に生きる庶民の姿と愛情のあり方を追究した喜劇で、ベルリン映画祭で国際平和賞を受賞している。久我美子主演『挽歌』(1957)も大ヒットさせた。井上靖原作の「わが愛」(60)は妻子ある佐分利信の愛人として生きた女性を演じた有馬稲子が称賛された。俳人としても知られ、“五所亭”という俳号で活躍、芭蕉の「奥の細道」(未)の映画化が、晩年の夢であった。1981年逝去。

小林正樹
こばやしまさき

1916年生。木下恵介の助監督を務め、『息子の青春』(1952)で監督デビュー。『この広い空のどこかに』(1954)は監督第4作にあたる。全6部・9時間38分の大作『人間の條件』(1959～1961)では戦争の不条理を鋭く突き、ヴェネチア映画祭でサン・ジョルジョ賞を受賞し世界的評価を高める。その後も、『切腹』(1962)と『怪談』(1964)でカンヌ国際映画祭の審査員特別賞を、『上意討ち 拝領妻始末』(1967)でヴェネチア国際映画祭の国際批評家連盟賞を受賞した。ドキュメンタリー『東京裁判』(1983)は、さまざまな手法で戦争否定の主題を追究した自身の集大成的作品となり、ベルリン映画祭国際批評家連盟賞を受賞した。1996年逝去。晩年は完全主義が災いし、映画製作の機会を狭めることも多かった。

新藤兼人
しんどうかねと

1912年生。吉村公三郎監督『安城家の舞踏会』(1947)の脚本を書き、一躍評価が高まる。『愛妻物語』(1951)で監督デビュー。この作品の成功で、自分が書いた脚本を自分で監督するという“映画作家”の道を歩み始める。その後も『原爆の子』(1952)、『縮図』(1953)、『第五福竜丸』(1959)と秀作を連発し、野心作『裸の島』(1960)はモスクワ映画祭でグランプリを受賞。その後も、師と仰ぐ溝口健二のドキュメンタリー『ある映画監督の生涯・溝口健二の記録』(1975)、津軽三味線奏者・高橋竹山の生涯を描いた『竹山ひとり旅』(1977)、公私をともにした乙羽信子の最終作『午後の遺言状』(1995)などを発表。2012年、100歳で逝去したが前年まで作品を発表するなど、最後まで映画作家としての人生を貫いた。

松山善三
まつやまぜんぞう

1925年生。木下恵介・小林正樹らの助監督を務めながら、脚本家としても実力を買われ、枝川弘監督『荒城の月』(1954)で脚本家デビューを果たす。1955年、女優・高峰秀子と結婚。監督デビューとなった『名もなく貧しく美しく』(1961)では、高峰秀子を主演に迎え、聾唖(ろうあ)者夫婦の愛を描き、デビュー作にして高い評価を得た。その後も、一貫した叙情性あふれるヒューマニズムを持ち味に『山河あり』(1962)、『わが一粒の麦なれど』(1964)、『ふたりのイーダ』(1976)、『典子は、今』(1981)などを監督する傍ら、小林正樹監督『人間の條件』(1959～1961)、豊田四郎監督『恍惚の人』(1973)、佐藤純彌監督『人間の証明』(1977)のような大作・話題作の脚本も書き続けた。2016年逝去。

知って損なし
名優揃い

主演俳優プロフィール

『煙突の見える場所』	**田中　絹代**　たなか　きぬよ 1916年生。『元禄女』(1924)でデビュー。主演作や名監督の出演作も多く、小津安二郎監督『大学は出たけれど』(1929)、溝口健二監督『西鶴一代女』(1952)、成瀬巳喜男監督『おかあさん』(1952)、木下恵介監督『楢山節考』(1958)、黒澤明監督『赤ひげ』(1965)、熊井啓監督『サンダカン八番娼館　望郷』(1974)など多数ある。1953年には、『恋文』で監督デビュー、『月は上りぬ』(1955)、『お吟さま』(1962)など全6作品を手掛けた。1977年逝去。	**上原　謙**　うえはら　けん 1909年生。『若旦那・春爛漫』(1935)でデビュー。田中絹代との主演コンビで製作された『愛染かつら』(1938)が大ヒット。名匠・成瀬巳喜男監督の出演作も多く、『めし』(1951)・『夫婦』(1953)・『妻』(1953)・『山の音』(1954)・『晩菊』(1954)などがある。そのほかの主な出演作は、木下恵介監督『花咲く港』(1943)、市川崑監督『三百六十五夜』(1948)、吉村公三郎監督『夜の河』(1958)などがある。1991年逝去。俳優・加山雄三の父である。
『この広い空のどこかに』	**久我　美子**　くが　よしこ 1931年生。オムニバス映画『四つの恋の物語』(1947)の一遍、豊田四郎監督「初恋」でデビュー。主な出演作に、成瀬巳喜男監督『春のめざめ』(1947)、今井正監督『また逢う日まで』(1950)、田中絹代監督『恋文』(1953)、木下恵介監督『女の園』(1954)、川島雄三監督『女であること』(1958)、野村芳太郎監督『ゼロの焦点』(1961)などがある。1960年代以降はTVドラマに主軸を移しつつも、竹中直人監督『119』(1994)などに出演し好演を見せている。	**佐田　啓二**　さだ　けいじ 1926年生。木下恵介監督『不死鳥』(1947)にて、デビュー作ながらいきなり田中絹代の相手役に起用される。その後は、大庭秀雄監督『君の名は』(1953)が大ヒット。そのほかの主な出演作に、佐々木啓佑監督『鐘の鳴る丘』(1948)、小林正樹監督『あなた買います』(1956)、木下恵介監督『喜びも悲しみも幾歳月』(1957)、小津安二郎監督『秋刀魚の味』(1962)などがある。1964年の自動車事故により、38歳の若さで急逝。俳優・中井貴一の父である。
『裸の島』	**乙羽　信子**　おとわ　のぶこ 1924年生。舞台での活躍後、木村恵吾監督・新藤兼人脚本『処女峰』(1950)で映画デビュー。新藤兼人監督の自伝的作品『愛妻物語』(1951)に出演を直訴しヒットを記録。以降も新藤兼人作品になくてはならない女優として『原爆の子』(1952)、『縮図』(1953)、『どぶ』(1954)、『人間』(1962)、『母』(1963)、『鬼婆』(1964)、『竹山ひとり旅』(1977)、『午後の遺言状』(1995)などに出演。新藤兼人監督とは1978年に結婚し、生涯の伴侶となった。1994年逝去。	**殿山　泰司**　とのやま　たいじ 1915年生。千葉泰樹監督『空想部落』(1939)でデビュー。「三文役者」を自称し、性格俳優として様々な作品に出演した。主な出演作に、吉村公三郎監督『安城家の舞踏会』(1947)、川島雄三監督『幕末太陽傳』(1957)、吉田喜重監督『秋津温泉』(1962)、今村昌平監督『「エロ事師たち」人類学入門』(1966)、大島渚監督『愛のコリーダ』(1976)、岡本喜八監督『近頃なぜかチャールストン』(1981)などがある。1989年逝去。エッセイストとしても活躍した。
『名もなく貧しく美しく』	**高峰　秀子**　たかみね　ひでこ 1924年、函館市生まれ。野村芳亭監督『母』(1929)で子役デビュー。山本嘉次郎監督『綴方教室』(1938)で初主演。主な出演作は、自身の主題歌も大ヒットした島耕二監督『銀座カンカン娘』(1949)、木下恵介監督『二十四の瞳』(1954)、成瀬巳喜男監督『浮雲』(1955)、増村保造監督『華岡青洲の妻』(1967)など枚挙にいとまがない。1955年に松山善三監督と結婚。2010年逝去。戦後日本映画界を代表する名女優である。	**小林　桂樹**　こばやし　けいじゅ 1923年生。古賀聖人監督『微笑の国』(1942)でデビュー。ホームドラマから社会派ドラマまで幅広く活躍。主な出演作に、今井正監督『ここに泉あり』(1955)、千葉泰樹監督『へそくり社長』(1956)、堀川弘通監督『黒い画集　あるサラリーマンの証言』(1960)、黒澤明監督『椿三四郎』(1962)、岡本喜八監督『激動の昭和史　沖縄決戦』(1971)、大林宣彦監督『あの、夏の日・とんでろじいちゃん』(1999)などがある。2010年逝去。

※本紙記載の一部は、インターネットサイト「KINENOTE」、「ぴあ映画生活」、「Wikipedia」より引用し編集しています。